

Point of note

■ 就労継続支援B型とは

雇用契約による一般の企業での就労が困難な障がい者に、就労機会を提供するとともに、生産活動により、知識および能力の向上に必要な訓練などを行う就労継続支援のひとつ。雇用契約は結ばずに作業分の工賃が支払われる仕組みで行われる。このサービスを通じ、雇用契約による就労継続支援A型や一般就労を目指す。



Creerではスタッフのスキルアップに力を入れている。簡単な調理の下ごしらえから、揚げや炒め作業をこなすようになった方も。



団体や企業の部署ごとに宅配も行う。



さまざまなおかずが楽しめる日替わり弁当。



徹底した調理作業中の衛生管理。



「とくしまIPPIN店」イベントに出店。



NPO法人 Creer

<http://www.creer.or.jp>

NPO法人 Creerが提供するの、障がい者が自分たちの可能性を見だし、地域の中で生き生きと働ける場所。現在の事業のその先に見据えるのは、誰もが幸せに安心して生きていける環境づくりだ。

「ほんの少しのサポートがあれば、 彼らは地域のなかで自立して生活していける」

8年前のオープン日、お弁当2個の販売数からスタートしたCreer。現在では、1日の販売数が300を超える日もあるという。12年にはここで働く障がい者は16人に増え、就労継続支援B型事業所の認定を受けた。「就労継続支援B型の申請を受理されると、職員報酬の保障や社会保険を完備して、これまでボランティアで協力してくれた方たちを社員として迎えられるようになりました。将来は一層経済的に自立した事業所になりたいと思っています」

全国の就労継続支援B型で働く障がい者の平均の月額工賃は1万4437円（13年/厚生労働省）だが、同法人の平均月額工賃は全員が3.5万円以上、スキルの高いスタッフは月によっては

STEP 1 創業のきっかけ
障がいのある人はこの世の宝である

障がい者にさまざまなスポーツを楽しむ機会を提供する国際的組織スペシャルオリンピックス日本で、15年間ボランティアとして活動し、その徳島地区事務局長も務めた喜多條雅子さんは2008年に障がい者とともに働く飲食店を運営する「NPO法人Creer(クレール)」を立ち上げた。設立のきっかけは、その1年前、認定NPO法人スペシャルオリンピックス日本名誉会長の細川佳代子さんを招いて行った講演会にあった。

STEP 2 事業スタート
さまざまな協力者に支えられ、事業所もスタッフも成長していった

そこで細川さんは「障がいのある人はこの世の宝である」、人として大切なものを、優しさや、信頼ということを教えてください。障がい者が幸せな人生を送れるかどうかは、周りの人たちの力にかかっている」と話した。

主催者でもあった喜多條さんは講演会後に細川さんから「あなたは明日から何ができますか?」と尋ねられた。障がい者が学校を卒業しても安心して働ける場所が少ない現状をずっと見てきた彼女は、障がい者が生き生きと働ける場所をつくることを決意する。

STEP 3 今後の展望
障がい者が安心して働き、自立して暮らしていくために

IPPIN店」のひとつとして認定されたことから、その後、評判が評判を呼び、手狭になった事業所は2度の拡張移転を行った。そして15年9月には3つ目となる新店舗をオープン。1日500食の調理に対応、全ての扉が二重扉で、エアシャワーも完備、さらなる衛生面でのケアにもこだわった一大施設となっている。

Profile

NPO法人 Creer 理事長 喜多條雅子さん

徳島県出身。高校生の頃からボランティア活動を始め、銀行勤務を経て専業主婦。長年のボランティア活動の経験とネットワークを活かし、2008年にNPO法人 Creerを設立。

飲食業の経験が全くなかった喜多條さんだが、食に一切の妥協はなかった。どこよりも美味しく、体に良いものを提供するのを念頭に、自分なりに勉強を重ねて日々改善に努めた。

「当店のコンセプトを知って、社会貢献と思って一回は来てくれる方はいますが、リピートしてもらうには、美味しくなければダメなんです。障がい者がつくっているからという甘えは完全に頭から外しました」

接客やレジ打ちなどの訓練も十分に行ってオープンに臨んだが、飲食店の礼儀作法などはお客さんから教わることも多かった。

「プレオープンの頃、身体障がいのある接客見習い中のスタッフが、レジで会計中のお客様がいるのに、新たに来店したほかのお客様の接客に向かってしまったことがありました。そのレジのお客様は、『今はこっちのお客がお金を払っているのだから、ちゃんと両手で受けとって、お礼を言ってから、次の人に対応するんだよ』と、優しく丁寧に教えてくださいました」

その方は近くにある大手保険会社の社員で、職場でのお店の紹介はもとより、その日から定年退職するまでの3年間、毎日通ってくれたという。

10年に徳島市が主催した食のイベントで、徳島産の野菜を使ったメニューを提供する店舗「とくしま

7万円を超える場合もある。そこには障がい者に自立した生活を送らせたいという喜多條さんの強い思いがある。「年金を足しても、このお金だけではまだまだ自立した生活はできません。月額工賃が常に10万を超えることができれば、経済的に自立が可能になると思います」

障がい者の安心して働ける環境をつくりながら喜多條さんは、グループホームの設立も準備中だ。今、ここで働いている障がい者の保護者がいなくなってしまうから、彼らが安心して働き続けられるよう、ゆくゆくは暮らしの場も確保したいと考えている。

「1階は夜でも障がい者が安心して集まれる飲食店。2階は飲食以外のお店や交流スペース、3階・4階は個室の居住部分、屋上にはレストランで振る舞う野菜を栽培する屋上菜園にする構想です」。既に設計図もあるという。喜多條さんはそう夢を語ってくれた。